

◆最初は読み聞かせも——小学校低学年では読み聞かせも交える

読み聞かせについて林公先生は、「小学校（に限らないが）では必要不可欠にして非常に有効な方法であり、特に一年生では絶対必要なものだ」（⑬四〇頁。括弧内は本連載二月号で紹介した文献の番号と頁数を示す。以下同じ）と述べている。朝の読書の実践を報告した最初の文献『朝の読書が奇跡を生んだ』（①）は、その舞台が高等学校であるため読み聞かせには触れていないが、二番目の文献『続・朝の読書が奇跡を生んだ』の「小学校の部」では、全校一斉に取り組んでいる三校全部が読み聞かせを行っている（②二五〇七七頁）。また、『すぐできる朝の読書実践マニュアル』では、小学校全校の報告——一校中七校で読み聞かせを行っている（⑬四八〇七一頁）。小学校では、朝の読書と読み聞かせは密接に結びついていると考えられる。

読み聞かせが必要なのは、小学一年生はまだ字を学んでいないため、字を読むことができず（⑬七二頁）、二年生も文字に対してまだ抵抗があり（⑬八六頁）、中学生にもどうしても読書ができない生徒がいる（⑫五二頁）ためである。

読み聞かせを行うのは、教師、小学六年生等の上級生、住民および保護者のボランティア、図書館職員などである。上級生が下級生のクラ

32

朝の読書にどう取り組むか(5)

——具体的な指針の解説③

薬袋 秀樹

筑波大学大学院教授

スて読み聞かせなどを行う（②五三、七二、⑫二五、三〇、⑬七九、八七頁）ことは学年間交流にもなり、「上級生には思いやり、下級生には感謝の気持ちがある」（②五三頁）。林先生も、朝の読書の精神を生かし、読み聞かせと朗読をうまく組み合わせていると評価している（⑬四〇頁）。ただし、朝の読書を推進している人々は、読み聞かせだけで読書の習慣ができるとは思っていない。林先生は次のように述べている。「たくさん読み聞かせをして本好きになったように見えても、決して読書ができるようになり読書好きになったわけではありません」（⑬四一頁）、「朝の読書」はあくまでも自分で読めるようになる練習です」（⑬四〇頁）。この根拠として、あちこちの講演先で出される次のような質問があげられている。「読み聞かせによって子どもたちはみんな本好き、読書好きになってくれるのだが、それもせいぜい小学校低学年くらいまでで、高学年になるに従ってほとんど本を読まなくなってしまう」（⑬四一頁）。

朝の読書の考え方は、読み聞かせによって、生徒はお話好きにはなるか、必ずしも読書好きにはならない、読書好きになるには、生徒が自分で本を読まなければならないというものである（⑥九五〇九七頁）。したがって、少しずつでも、徐々に生徒に自分で本を読ませることが必

要になる。ジム・トレリスも、『読み聞かせ——この素晴らしい世界』のなかで、「いくら読み聞かせをしても、子供がそれを実践に移す時間がなければ、無駄になる」と述べている。これらの意見は、読み聞かせの限界と朝の読書の意義を明確に指摘するものであり、今後、さらに論議を深める必要がある。

◆よい本を紹介する——教員はHRや授業や掲示などあらゆる機会に本を紹介する

朝の読書の四原則の「③ 好きな本でよい」については、「読む本は子ども自身に選ばせる、自分の好きな本をなんでも選んでよい」と説明されている（③一七頁）。しかし、読書をしていない生徒ほど、どんな本を読んだらよいのかわからないものである。林先生も、「たいいていの子は、何を読んだらいいのかわからないのです」と述べている（③一七頁）。

子どもたちが本を探すときに参考にするのは、「一、友だちのすすめ、二、先生のすすめ、三、文字によるすすめ」といわれている（⑭六八頁）。「友達の『この本、おもしろい』の一言が子供達を動かしている」という報告もある（⑫六一頁）。

林先生は、「クラス全員が自分で選んだ本を読むわけですから（中略）友だち全員からどん

な本が面白いかを教えてもらえる」と説明し（⑬三二頁）、同時に、教師は、生徒一人ひとりの特徴に合わせて「その子に勧めたい本をあらかじめクラスの人数分用意しておく」と述べている（③六〇頁）。生徒同士の紹介を期待するとともに、教師による本の紹介を求めている。

① 生徒と教師による本の紹介

（生徒による紹介）

「生徒たち自身を読んでおもしろかった本、感動した本を（中略）紹介することである（②二二〇頁）。主なものは、生徒間の日常会話での紹介である。生徒は、自分がある本から受けた感動を友だちなどのほかの人に伝えたがり（⑥二二頁）、「面白い本があると互いに紹介し合う」ようになる（⑬八九頁）。

生徒が、手製の本の帯をつくり、自分の紹介文を記入する試みが行われている。気に入った一冊の本について、感想などを書いた帯をつくり、図書館に置いたり、授業で紹介したりして、朝の読書の時間に読む（⑪一五四―一五八頁）。帯の裏面に簡単な返事を記すことで、紹介した生徒と読んだ生徒の交流ができる（⑬九四頁）。生徒によるおすすめ本の取り組みもある。生徒は、朝の読書で読んだ本のなかからすすめた本を選び、本の書名等、すすめる理由、話の内容、紹介者名をカード（B4判）に書く。カードは教室の壁に掲示する（⑬五八頁）。

（教師による紹介）

岡山県落合町立落合中学校では、教師は「読書の広がり」と深まりを求めて、生徒への本の推薦を行なう」ことを求めている（②一一三頁）。担任は、自らの読書体験や感動を生徒に語りかけること（⑥二三九頁）が必要である。担任が何気なく話題にした本が次々に読まれる（⑫五五頁）、教師が読んで、おもしろい、読んでもらいたいと思った本を紹介し、教卓上の「担任のおすすめ本棚」に置いておくと、すぐに借りられるという報告もある（⑭二二頁）。

授業に関連して、本の紹介を行うこともできる。秋田県角館町立角館東小学校では、「教科担任は、学習内容との関連で、本の紹介や読書の啓蒙をしよう」と呼びかけている（②一三一頁）。授業のなかで本との触れ合いを大切にし、国語・地理・歴史・理科・算数など、全教科にわたって本とのかかわりを持たせ、それぞれの興味に添って本を選ばせている例がある（②七四頁）。

宮脇隆志先生（神奈川県立高等学校）は、文芸に限らず、自然科学・社会科学・スポーツ・趣味など多彩な本を紹介したい、教師のすすめる本は生徒にはむずかしい本が多くなりがちであるため、生徒の目の高さで本を紹介したい、と述べている（②二一九頁）。

教師にとって、「本を紹介することは思うほ

ど簡単なことではない。教師の読書体験が指導のための材料となるからだ。特に若い教師は活字離れ世代の一人である」という意見がある(⑫二一〇頁)。個々の教師の努力のみに任せることなく、学校全体として、教師をバックアップすることが必要である。「それぞれの教科・科目で、生徒たちの力にあった本のリストをつくることができればすばらしい」という意見もある(⑫二一九～二二〇頁)。

学級文庫の本を選択することは、実質的に本を紹介することである。教室にはさまざまな学力を持った児童がいるため、小学校では、学級文庫のレベルを、その学年よりも三学年上下あたりまで広げると、児童一人ひとりが自分に合った本を見つけることができる(⑬一〇七頁)。ある授業で取りあげた事項に関する本や、総合学習の学習内容に関連する本を学級文庫に加えておくこともできる(⑬一〇七頁)。高等学校では、活字離れが長い生徒のために、本や活字に親しむための本も必要である(⑬一〇三頁)。

(2) 紹介や推薦の方法

主に、ブックトーク、印刷物の二つがある。

〈ブックトーク〉

あるテーマを選び、それに沿った本を一〇冊ほど用意し、口頭で簡単に紹介する方法である(⑭一九頁)。これは、教師だけでなく、生徒でもできる。葛飾区立上平井小学校では、教師に

よる四五分間のブックトークを試みたが、その結果、日々の生活のなかで「気軽に一、二冊を紹介していけばいいのではないか」という共通の認識に達している(⑭二二頁)。

ほかに、生徒が読んでよかったと思う本を口頭で簡単に紹介する読書紹介スピーチ(⑪一〇～一一五頁)や、生徒のグループによるブックトークがある(⑪二一六～二二二頁)。

〈印刷物〉

学校、各教師や学校図書館が発行するニュースに掲載するほか、教室や図書館の掲示板に貼り出すなどの方法がある。ニュースには「学級だより」「学年だより」(②一三九頁)、「図書館通信」(⑩三九頁)、「読書ニュース」(②二二〇頁)、「朝の読書だより」、生徒版「朝の読書だより」(⑫九一頁)などがあり、生徒や教師による本の紹介、推薦文や感想文を掲載している。ほかに、生徒が、読んでよかった本を簡単な文章と絵で紹介するコピー作文(⑪一二一～一二六頁)、読書新聞(⑪一三三～一三八頁)などもある。

◆読んだ感想を書く——定着したら、本の記録・感想を自主的に書くよう助言する

朝の読書の四原則の「(4) ただ読むだけ」は、読書感想文や記録は一切求めないことを示して

いる。ここでいう読書感想文とは、課題図書を指定し、一定字数の作文を提出することを求めるものと考えられる。この読書感想文に対しては、とくに読みたいと思わない課題図書を読まなければならぬこと、作文には、読書とは全く異なるはるかに高度な能力と訓練が必要であること、多くの生徒は作文が苦手であることから、読書感想文を契機に、読書嫌いになる生徒が少なくないという批判がある(③二〇～二二頁)。

他方で、人は、読みたい本を読んでおもしろいと感じたときは、自発的に本の感想を他の人に語ったり、簡単な紹介文や感想文を書いたりしたくなる。生徒は、本から受けた感動や楽しさを友だちや他の人に伝え、互いに紹介し、情報交換を行うようになる(④七二、⑥二一、⑬八九、一一一頁)。林先生は、「子どもは(中略)感動したことならば、強制されなくてもいくらかでも書こうとする」(④七二頁)と述べている。おもしろかったと感じたら、「短い感想文は抵抗なく書ける」(②一三九頁)という報告もある。

先に紹介したように、朝の読書に関連して、本の感想文や推薦文を書くさまざまな機会がある。林先生も、「チャンスを見計らって、生徒に感想を書かせてみる」ことを提案している(③六三頁)。そして、「自発的に感想を書きたがる子どもたち」と題して、朝の読書を始めた生徒たちが、学校図書館の掲示板に貼り出され

る読後感想をたくさん、自発的に書くようになつたことを紹介している(④六二～六三頁)。

生徒が自発的に書いた紹介文や感想文が発展したものが、「心の虹」である。これは、ある学校の生徒全員が、朝の読書の時間に読んだ本のなかから一番感動した本を選び、「心に残った一冊」と題して、簡単な紹介文や感想文を書き、学校はそれをまとめて他の学校に送り、送られた学校は、同じことをして相手の学校に送るものである(④六七、七三～七八、⑦四九～五〇、⑪二五～二九頁)。生徒は、自分の感想を表現するとともに、他の学校の生徒の紹介や感想を読むことができる。これによって、読書体験をより広く深いものとすることができ、学校を超えて、生徒と生徒の心と心のつながりを実現することができる(⑦四九～五〇頁)。

書くことについては、読後感想だけでなく、さまざまなかたちで生徒に文章を書く機会を設け、それを使って書く力を養成することが効果的である。これと朝の読書を組み合わせることができる。事例としてあげられている文章には、比較的短いものから、長いものまでさまざまなレベルがある。短いものでは、船橋学園女子高等学校の大塚笑子先生のクラスの学級通信「あこがれ」の生徒の意見欄がある(④六七～六九、⑦四〇～四四頁)。長いものでは、同高等学校の「私の歴史」(③六一、⑦四五～四六頁)や

岡山県立鴨方高等学校の国語通信「今ここで」(②二七～二七五、④六九～七二、⑥二〇三～二〇六頁)がある。

「私の歴史」は、全新生入生に対し、誕生から高校入学までの自分の歴史を、入学前に原稿用紙二〇枚以上書くように求めているもので、卒業までの三年間に折に触れて書き続ける。林先生は、「私の歴史」の最後に「私の読書の歴史」についても書くことを求め、それをできるだけ早めに読んでノートにメモし、それからヒントを得て、生徒一人ひとりの指導や助言に利用している(③六一頁)。

「今ここで」は、国語の授業の初めの一〇分を使って、そのとき一番書きたいことを自由に書かせ、そのうちいくつかを授業通信「今ここで」として発行するものである。この実践と朝の読書を結びつけることによって、読書と作文の相互作用が生じ、作文の内容が豊かになり、生徒は世界や人の心をより広く深く見つめることができるようになっていく(④六九～七三頁)。

◆書店関係者にも協力を求める

朝の読書に取り組んでいる教員から、朝の読書に関して書店関係者に対する要望があげられているので紹介しておきたい。これは、書店における書籍の販売業務と地域における営業活動の二つに分けることができる。

書籍の販売業務では、朝の読書関係の本を常時置いてほしい(⑫一〇〇頁)、書店には「朝の読書コーナー」を設置してほしい(⑫一一三頁)の二点がある。後者は、主に朝の読書で生徒が読む本が中心と思われる。

地域における営業活動では、第一は、「朝の読書が奇跡を生んだ」などの本を読んでほしい、共感できたら、知り合いの教師や教育関係者にその本をすすめてほしい(⑫七七頁)というもので、朝の読書の普及への協力を求めるものである。第二は、地域の書店から生徒の読書に役立つ図書目録の提供等の協力と支援を得たい(⑫四三頁)、若手書店経営者にもっと学校に来てもらい、新刊書、話題の本、子どもの本に関する資料を提供してほしい(⑫二二頁)というもので、本の確保や生徒への案内のために、本に関する資料や情報の提供を求めている。書店との協力や書店からの援助の獲得も忘れてはならないと思われる。

*

以上で、「具体的な指針」七項目に関する説明をひとまず終えます。今後も、朝の読書の有意義な活動の内容を整理していきたいと思いたすので、よろしく願ひいたします。

(注) ジム・トレリス著／亀井よし子訳『読み聞かせ——この素晴らしい世界』一九八七年、高文研、一七九頁。